

都市施設が居住者のまちへの愛着に及ぼす影響に関する研究

Effects of Urban Facilities on the Development of Residents' Place Attachment

鈴木 崇之*・石川 徹**・貞広 幸雄***・浅見 泰司****

Takayuki Suzuki*, Toru Ishikawa**, Yukio Sadahiro*** and Yasushi Asami****

This research examined local residents' feelings of attachment to urban facilities and to the city, through an on-site questionnaire survey. Three groups of residents were identified in terms of their levels of attachment to the city: one group had a relatively low attachment, and the other two groups had a higher attachment but differed in the degrees of sense of belonging and desire for permanence. Detailed analyses of the characteristics of these three groups showed that the feeling of attachment to the city was related to the feeling of attachment to urban facilities and the attributes of residents. These results suggest the possibility of enhancing residents' place attachment through the practice of urban planning, for example, providing ideas for the construction and maintenance of urban facilities.

Keywords: place attachment, urban facilities, local residents, individual attributes, urban planning
まちへの愛着、都市施設、居住者、個人属性、都市計画

1. はじめに

現在の日本は、世界に類を見ない速さで人口減少の局面を迎えている。このように縮小が進む社会においては、個々の地域に密着しながら、その多様なニーズを満たすまちづくりを進めていくことが都市計画の課題として挙げられる。また、地域の多様なニーズに都市計画が応えるに当たっては、計画への住民の参加が重要だと考えられている。行政だけでなく住民も参画して策定された計画の方が、住民の要望を反映するものとなる可能性が高い上、参加のプロセスを通じて、住民同士および住民と行政の関係が強くなると期待されるからである¹⁾。

しかしながら、現在の都市においては、都市計画への住民の参画は十分であるとは言えない。その理由として、行政が中心となって計画を策定し住民と議論するための都市計画上の協議システムを用意することができていないことや、住民参加のための方法論が十分に確立していないことなどが挙げられる²⁾。一方で、住民側にも計画参加への十分な動きが見られないのも事実である³⁾。

では、都市計画マスタープランにおける公聴会やワークショップへの住民の積極的な参加を促すためには、どうすればよいのだろうか。現代の都市においては、かつてのような近所付き合い、人と人とのつながりが薄くなってきており、人を介して参加を促すことはなかなか難しいと思われる。そこで重要な要素として着目することができるのが、個々の住民のまちに対する愛着の感情である。既存研究においても、地域やまちへの愛着が、まちへの積極的・協力的な関与を促し⁴⁾、都市計画やまちづくりに対する関心を向上させる可能性⁵⁾が指摘されている。このことが持つ重要性は、まちにおける人とのつながりがより薄くなると考えられる将来において、一層増すと思われる。また、J. ジェイコブズをはじめとして、人々の間の信頼関係やネットワー

クをソーシャルキャピタルとして捉え、住民の地域への関心が、都市に活力をもたらす計画の実現およびその持続的運用につながるという考え方も提唱されている⁶⁾。

このように、まちへの愛着が都市にとって重要な意味を持ち得ることが既往研究において示唆されているものの、まちへの愛着形成に関する知見を、都市の施設整備計画などに活用することに対する有効性については、さらなる研究が望まれる。また、愛着に関しても、まちへの愛着の感情をもたらす要因としていくつかの点（風土への接触⁷⁾、消費行動の際の店舗でのコミュニケーション⁸⁾など）が示唆されているが、その概念についてはまだ十分明らかになっていないとは言えず、より深く調べる必要がある。

そこで本論文では、整備等の面で都市計画が関与できる要素として都市の様々な施設を取り上げ、各施設への愛着とまちへの愛着がどのような関係にあるかについて調べる。具体的な施設としては、行政が計画を通して携わることができるものとして、広場、図書館、商店街、小学校を取り上げる。これらの施設およびまちへの愛着の特徴を調べることで、住民のまちへの愛着を向上させることができるような、今後の施設整備計画を探ることを目的とする。

2. 方法

対象地域は目黒区都立大学駅周辺の地域とし、対象施設は(A)駅前広場(都立大学駅高架下広場)、(B)図書館(八雲中央図書館)、(C)広場(めぐろ区民キャンパス広場)、(D)商店街、(E)小学校(八雲小学校)とした(図1)。この地域を選んだ理由としては、多様な施設が存在することと、住宅街であるため対象地をよく知る人が暮らし、以下で述べるアンケートへの回答者の属性(年齢や居住年数など)にも多様性が見込まれるということが挙げられる。

* 学生会員 東京大学大学院工学系研究科 (University of Tokyo)

** 正会員 東京大学空間情報科学研究センター (University of Tokyo)

*** 正会員 東京大学大学院工学系研究科 (University of Tokyo)

**** 正会員 東京大学空間情報科学研究センター (University of Tokyo)



図1 本研究の対象地域、対象施設及び主な調査場所

この対象地域への愛着（まちへの愛着）および各施設への愛着について、2009年12月4日～10日に街頭アンケートを行い、地域および周辺の住民64人の方々に協力していただき調査を行った。具体的な調査実施場所としては、都立大学駅周辺で人が多く集う緑道や広場など3箇所（氷川神社前、目黒区民キャンパス、香川緑道；図1中の×印）を選定し、以下で述べるように幅広い住民の方から回答を得ることができた。回答者の性別は男性15人、女性49人であり、平均年齢は52歳（30歳代以下15人、40歳代11人、50歳代8人、60歳代13人、70歳代9人、80歳以上8人）、居住地は対象地域内が50人、対象地域外が14人であった。

まちへの愛着については、既存研究⁹⁾において使用されている13個の質問項目により尋ねた（表1、左列）。これらの質問は、まちへの感情を述べた文章から成り、それぞれに対する各自の思いの強さを、4=「そう思う」、3=「ややそう思う」、2=「あまりそう思わない」、1=「そう思わない」の4段階で回答してもらった。

施設への愛着については、まちへの愛着に関する13の質問項目のうち、施設に対して利用が可能と考えられる9個の項目を選び、上記と同じく4段階で回答してもらった。（表1、右列）。

表1 まちおよび施設への愛着に関する質問項目

まちへの愛着（13項目）	施設への愛着（9項目）
1. 住みやすいと思う	
2. お気に入りの場所がある	1. お気に入りの場所である
3. 歩くのは気持ちいい	2. ここにいて気持ちいい
4. 雰囲気や土地柄が気に入っている	3. 雰囲気が気に入っている
5. このまちが好きだ	4. ここが好きだ
6. このまちではリラックスできる	
7. このまちは大切だと思う	5. ここは自分にとって大切だと思う
8. 愛着を感じている	6. 愛着を感じている

9. 自分の居場所がある気がする	
10. 自分のまちだという感じがする	
11. ずっと住みたい	7. ずっと使い続けたい
12. いつまでも変わってほしくないものがある	8. いつまでの変わってほしくない
13. なくなってしまうと悲しいものがある	9. なくなってしまうと悲しい

さらに、各施設への愛着の要因を調べる。都市の施設には様々な種類のものがあるが、既存研究では、店舗についての愛着を調べたものが見られる。それによると、利用店舗でのコミュニケーション及び来訪頻度が愛着に正の影響を与え、「店舗において話をする」という要因の重要性が示されていた⁹⁾。しかし、本研究では店舗以外の施設も扱うため、上記のコミュニケーションや来訪頻度以外の要因も考え、施設の種類に応じた愛着を調べることができるような要因を選定した。

具体的には、既存研究⁹⁾において地域への愛着に影響を与えることが示されている諸要因（地域の風景を見ることが多い、鳥や虫の鳴き声を聞くことが多い、屋外の空気に触れることが多い、地域の人々とあいさつをする機会が多い、地域の人々と話をする機会が多い）を参考に、「触れる（利用）」、「話す（交流）」、「見る（外観）」、「聞く（音）」、「思う（感情）」の5つの要因を設定した。さらに、前述の通り本研究は都市における施設に焦点を当てているので、施設で発生すると考えられる要因をより細かく考えた。例えば、図書館や広場では、単に利用するだけでなく、くつろぐことや遊びに行くということも大きな目的になるかもしれない。また、施設を「見る」といっても、何気なく目にしていてのと、見た目がよいと感じて見ているのとでは、愛着のもたらし方も異なるであろう。以上から、表2に示す10要因を考察の対象とした。

表2 施設への愛着の要因に関する質問項目

1. よく利用する [触れる]
2. くつろげる場所がある [触れる]
3. 遊びに行く [触れる]
4. 人と話ができる場である [話す]
5. 見た目が良い [見る]
6. よく目にする [見る]
7. 音を聞く [聞く]
8. そこに行くと同じ人に会う [思う]
9. 昔から使っている [思う]
10. 誇りに感じる [思う]

これら愛着に関する質問に加えて、回答者の個人属性として、性別、年齢、職業、居住地、居住年数、同居人数、

家族構成、子供の種類と人数について尋ねた。

3. 分析

3-1. まちへの愛着

まず、まちへの愛着についての回答の特徴を見るため、まちへの愛着の構成項目1~13（表1、左列）への各被験者の回答を因子分析（最尤法、Kaiser の正規化を伴うプロマックス回転）したところ、2つの因子を抽出することができた（図2、表3）。因子数については、図2から因子数2の所でスクリープロットの傾きが変わっていると判断でき、また、この妥当性をモデル適合度検定（カイ二乗検定）によって確認した。これは「因子数 n 個というモデルに観測データが適合している」という帰無仮説に対する検定で、因子数1の場合は有意確率0.05以下となり棄却されるため適当でないが、因子数2では適合性が支持されることがわかる（表4）。なお、項目1（住みやすい）については、共通性の値が0.06と低かったため、以下の分析からは除外した。項目2（お気に入り）については、共通性の値が同様に小さいが、まちへの愛着の指標（13個の質問項目への回答の平均値）との相関が0.35と低くないため残すことにした。

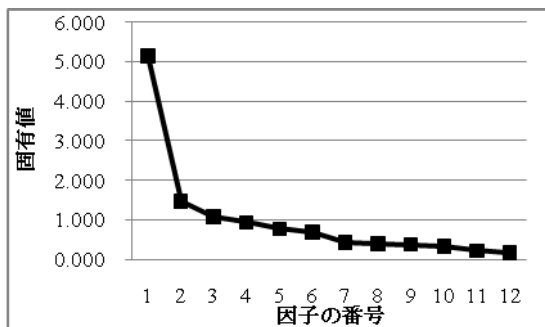


図2 まちへの愛着の因子分析スクリープロット

表3 まちへの愛着の因子負荷量行列

質問項目	第1因子	第2因子	共通性
1（住みやすい）	—	—	0.06
2（お気に入り）	0.06	0.22	0.09
3（歩く）	0.30	0.11	0.20
4（雰囲気）	0.76	-0.07	0.74
5（好き）	0.97	-0.15	0.82
6（リラックス）	0.44	0.33	0.58
7（大切）	0.70	0.06	0.55
8（愛着）	0.84	-0.07	0.73
9（居場所）	0.64	0.31	0.71
10（自分のまち）	0.26	0.58	0.87
11（住み続ける）	0.35	0.24	0.38
12（変わってほしくない）	-0.28	0.90	0.51
13（なくなると悲しい）	0.12	0.59	0.85
因子の寄与率（%）	38.8	9.1	
累積寄与率（%）	38.8	48.0	

表4 因子分析モデルの適合度検定

因子数	カイ2乗	自由度	有意確率
1	91.8	54	0.00
2	48.1	43	0.27

この二因子の解釈については、表3を見ると、第一因子は、項目4（雰囲気）、項目5（好き）、項目7（大切）、項目8（愛着）、項目9（居場所）の因子負荷量が大きいため、この因子を「現在好意・親近感」と名づけた。第二因子は、項目10（自分のまち）、項目12（変わってほしくない）、項目13（なくなると悲しい）の因子負荷量が大きいため、この因子を「帰属意識・持続願望」と名付けた。なお、本評価尺度を用いた先行研究¹⁰⁾においても、「地域愛着（感情）」と「持続願望」という主成分が、地域への愛着に関する重要な要素として抽出されていた。

これら二つの因子に対する各回答者の因子得点（回帰法）を計算し、2次元平面上にプロットすると図3のようになる。これを見ると、第一因子、第二因子の因子得点の相対的な高低により、「第一因子、第二因子いずれも高い」、「第一因子が高く、第二因子が低い」、「第一因子、第二因子いずれも低い」という3つの回答者グループに分類ができそうにわかる。この分類の妥当性を検証するため、因子得点を基に回答者のクラスター分析（平均ユークリッド距離、重心連結）を行い、3つのクラスターを抽出したところ、上記分類との正分類率は100%であったため、この分類は妥当であると判断した。

以上のように、回答者を大きく3つのグループ（まち愛着因子分析グループと呼ぶ）に分けることができる。ここでは、それぞれのグループのまちへの愛着について見てみる。

まず、今回使用した愛着の評価尺度を用いた先行研究¹⁰⁾によると、高松、豊橋、鹿児島の一市を対象とした調査において、回答値（評価値）の平均は4段階で3.1であった。これを参考にすると、図3における回答者グループ1（平均3.1）は平均的な愛着を持っており、グループ2（平均3.9）は愛着の程度が高く、グループ3（平均3.4）はやや高いと言える。

一方で、本研究においては、グループ1の愛着の程度は相対的に低く、対象地域内では愛着が低いと言うことができる。また、グループ2とグループ3を区別するものは第二因子の得点であるが、相対的にグループ2の方が高いため、これをグループの命名に反映させることにした。以上から、3つの回答者グループの名称を、グループ1：「愛着平均者」（対象地においては相対的に愛着低）、グループ2：「愛着高、帰属・持続意識高」、グループ3：「愛着やや高、帰属・持続意識低」とした。

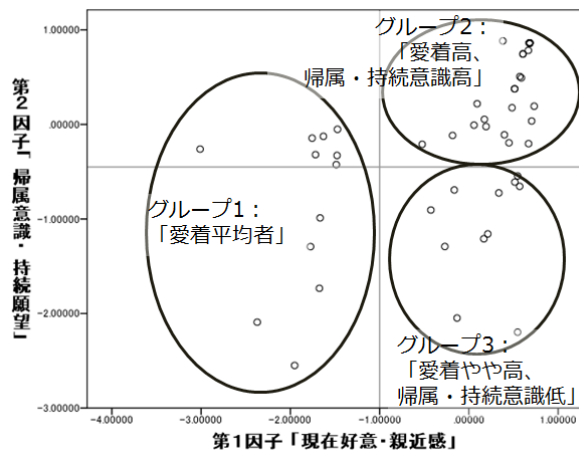


図3 各回答者の因子得点の2次元平面プロット

前述の、因子分析による3つのグループ分けから、グループ2は第一因子、第二因子の得点がともに高いため、まちへの愛着（12個の質問項目への回答の平均値）も高くなると想像されるが、この2因子で説明される分散は全体の48%に過ぎないため、その点を確認するべく、さらに詳しく愛着の様子を調べてみる。まちへの愛着に関する12個の質問項目への回答が全回答者の平均値より高いか低いかによって、回答者を「まち愛着上位層」と「まち愛着下位層」の2つに分け、それぞれが上記の3グループに占める割合を調べた（図4）。

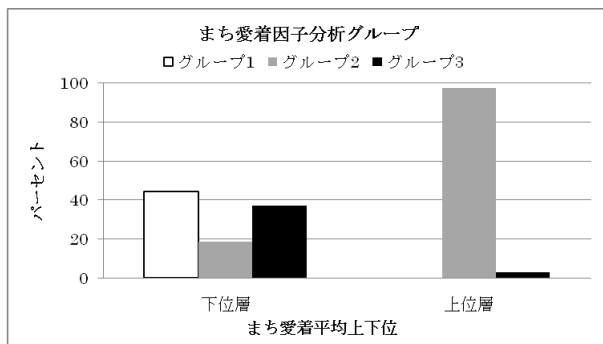


図4 まち愛着因子グループごとの、まちへの愛着上位層・下位層の分布

この図が示すように、まちへの愛着上位層の100%近くが「愛着高、帰属・持続意識高」（グループ2）に属するのに対し、まちへの愛着下位層においてはその割合は20%以下となり、「愛着平均者」（グループ1）および「愛着やや高、帰属・持続意識低」（グループ3）の割合が高くなることがわかる。すなわち、まちに対して高い愛着を持つことと、まちへの帰属・持続意識が高いことの間には強い関係があることを示唆している。なお、ここで「まちに対しての愛着」、「まちへの帰属・持続意識」と呼んでいる概念は、1つの評価項目への回答値で表されるものではなく、分析で

用いた12個の項目すべての回答によって総合的に説明されるものである。

では、このようにまちへの愛着が高い帰属意識・持続願望グループの人たちの属性には、どのような特徴があるのだろうか。

3-2. まちへの愛着と個人属性の関係

上で述べた3つのまち愛着因子分析グループの特徴を見るため、個人属性のうち年齢、居住地域、居住年数、子供の有無を説明変数、3つのグループを目的変数として、判別分析を行った（表5）。第1判別関数、第2判別関数のWilksラムダの値は0.65、0.87であり、それぞれ1%有意、5%有意であった。

表5 標準化された判別係数およびグループ重心の関数

	第1判別関数	第2判別関数
年齢	-0.55	0.4
居住地域	-0.29	0.21
居住年数	0.19	0.57
子供の有無	0.74	0.58
グループ1	-0.92	-0.49
グループ2	0.01	0.28
グループ3	0.96	-0.52

この結果から、「年齢が若い」、「子供を持っている」という属性を持つ人は「愛着やや高、帰属・持続意識低」（グループ3）に入りやすく、「年齢が高い」、「居住年数が長い」、「子供を持っている」という属性を持つ人は「愛着高、帰属・持続意識高」（グループ2）に入りやすいことがわかる。このことは、子供がいる人は、若い人は今後帰属・持続意識の低い状態にあるが、年齢を重ねた人は帰属・持続意識が高まる傾向を示している。

3-3. まちへの愛着と施設への愛着の関係

まちへの愛着の形成に施設への愛着がどのように関係しているかを見るため、上記の3つのまち愛着因子グループごとに、施設への愛着の程度を調べた。具体的には、先程と同じく、施設への愛着に関する9個の質問項目への回答が全回答者の平均値より高いか低いかによって、回答者を「施設愛着上位層」と「施設愛着下位層」の2つに分け、それぞれが上記の3グループに占める割合を調べた（図5）。

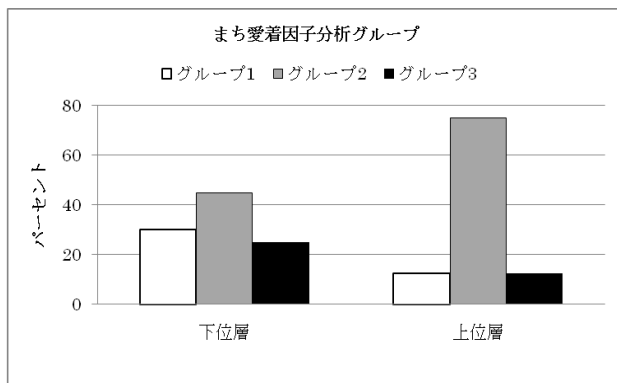


図5 まち愛着因子グループごとの、施設への愛着上位層・下位層の分布

これから、施設への愛着上位層の70%以上が「愛着高、帰属・持続意識高」（グループ2）に属していることがわかる。一方、施設への愛着下位層を見ると、上位層と比べて「愛着平均者」（グループ1）に属する人の割合が増加し、「愛着高、帰属・持続意識高」（グループ2）の割合が減少する。3-1節において、「愛着高、帰属・持続意識高」（グループ2）に属する人は、まちへの愛着が高い傾向にあることは既に示した。このことから、施設への愛着とまちへの愛着の間には一定の関係があり、施設への愛着を高めれば、まちへの愛着も高まる可能性があることを示している。

この点についてさらに詳しく見るため、各施設への愛着に関する9個の質問項目への回答と、まちへの愛着に関する13個の質問項目への回答の2組の変数間の正準相関分析を行った。その結果、広場（施設C）と小学校（施設E）について有意傾向（10%有意）にある正準変数が得られ、正準相関係数はそれぞれ0.77と0.75であった（表6）。

表6 施設への愛着とまちへの愛着の正準相関分析
(C) 広場 ($r=0.77$)

変数	正準係数	正準負荷量
(施設) 4. ここが好きだ	1.75	0.39
(まち) 4. 雰囲気や土地柄が気に入っている	0.78	0.35
(まち) 12. いつまでも変わってほしくないものがある	-0.73	-0.44

(E) 小学校 ($r=0.75$)

変数	正準係数	正準負荷量
(施設) 7. ずっと使い続けたい	1.67	0.27
(まち) 3. 歩くのは気持ちいい	-0.96	-0.72

正準係数および正準負荷量を見ると、広場の場合、施設への愛着には「ここが好きだ」という項目が正に効いており、まちへの愛着には「雰囲気や土地柄が気に入っている」という項目が正に、「いつまでも変わってほしくないもの

がある」という項目が負に効いている。このことから、広場に関しては、施設・まちへの愛着ともに、現在の「好き」という要因が強く、将来的な永続についての願望は要因として弱いことがわかる。

小学校の場合、施設への愛着には「ずっと使い続けたい」という項目が正に効いており、まちへの愛着には「歩くのは気持ちいい」という項目が負に効いている。このことから、小学校に関しては、過去の記憶と将来への永続に対する願望が愛着の要因として強く、まちへの愛着についても、単に「歩くだけ」といった限定的な利用の要因は弱いことがわかる。

これらの結果より、公共のオープンスペースであり人々が集う場所である広場、および、地域・近隣住区を中心とも考えられる小学校に対する愛着が高い人ほど、まちへの愛着も高くなる傾向があることがわかる。

3.4. 施設への愛着の要因

施設に対する愛着の気持ちを引き起こす要因を見るため、施設ごとに、愛着の要因に関する10個の質問項目（表2）への回答を説明変数、愛着に関する9つの質問項目（表1右列）への回答の平均を目的変数として、重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。

その結果、駅前広場に関しては「くつろげる場所がある」、「人に会う」、「誇りに感じる」という項目が、図書館に関しては「よく利用する」、「くつろげる場所がある」、「見た目が良い」、「よく目にする」という項目が、広場に関しては「遊びに行く」、「誇りに感じる」という項目が、商店街に関しては「遊びに行く」、「見た目が良い」、「昔から使う」、「誇りに感じる」という項目が、小学校に関しては「利用する」、「誇りに感じる」という項目が、各施設への愛着を高める要因となっていることがわかった（表7）。

表7 施設への愛着の要因に関する重回帰分析
(A) 駅前広場 ($R^2=0.72^{***}$)

変数	非標準化係数	標準化係数	t値
2. くつろげる	0.39	0.43	4.61***
8. 人に会う	0.20	0.20	2.52**
10. 誇り	0.34	0.37	3.79***

(B) 図書館 ($R^2=0.69^{***}$)

変数	非標準化係数	標準化係数	t値
1. 利用する	0.25	0.41	4.15***
2. くつろげる	0.28	0.42	4.33***
5. 見た目	0.32	0.24	3.04***
6. 目にする	0.12	0.18	2.24*

(C) 広場 ($R^2=0.60^{***}$)

変数	非標準化係数	標準化係数	t値
3. 遊ぶ	0.20	0.43	4.92***
10. 誇り	0.33	0.51	5.81***

(D) 商店街 ($R^2=0.59***$)

変数	非標準化係数	標準化係数	t値
3. 遊び	0.27	0.27	2.73**
5 見た目	0.28	0.23	2.04*
9. 昔から使う	0.28	0.37	3.68***
10. 誇り	0.23	0.25	2.13*

(E) 小学校 ($R^2=0.62***$)

変数	非標準化係数	標準化係数	t値
1. 利用する	0.25	0.30	3.05***
10. 誇り	0.49	0.64	6.52***

(注) * $p<.05$; ** $p<.01$; *** $p<.001$.

3-5. 施設への愛着とその要因、および属性との関係

上記の分析から、施設の種類によっては、それへの愛着とまちへの愛着に相関があることが示された。このことを都市計画的な視点から見ると、施設への愛着を高めるよう誘導することにより、まちへの愛着も高めることができる可能性を示唆している。例えば、商店街（施設D）に対して得られた「遊び（項目3）」という要因に着目すると、今後の商店街の在り方として、スーパーマーケットなどと商業的役割を競合するだけではなく、地域住民が楽しむ感覚で行ける場所を目指すことが愛着を高める上で効果的と言える。そこで本節では、3-3節でまちと施設の愛着の関係が有意傾向（10%有意）にあると示された2つの施設（広場、小学校）について、その施設への愛着がどのような属性の人にとって高くなっているかを調べた。

まず広場に関しては、その愛着の程度と年齢が関係していることかわかり、図6に示すように50歳代および60歳代の人々の愛着の程度が他の世代と比べて低くなっている（それ以外の年代では大きな差が見られない）。

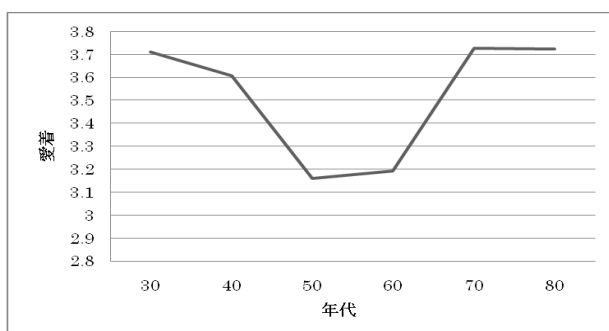


図6 年代別の広場に対する愛着の程度

では、なぜこの世代の愛着が低くなっているのかを調べるため、施設への愛着の要因に関する10個の質問項目（表2右列）への回答を説明変数、年代（50、60歳代か否か）を目的変数として、判別分析を行った（表8）。

表8 年代を目的変数とする判別分析

標準化された判別係数			
1 利用する	-0.12	6 目にする	0.16
2 くつろげる	0.59	7 音を聞く	-0.24
3 遊ぶ	0.77	8 人に会う	-0.12
4 話をする	0.23	9 昔から使う	-0.21
5 見た目	-0.42	10 誇り	0.26

グループ 重心の関数	
50、60歳代	-1.09
それ以外	0.52

これより、「くつろげる場所がある」、「遊びに行く」という項目が正に、「見た目がよい」という項目が負に強く効いていることがわかる。これを各年代グループの重心の位置と照らし合わせて見ると、この広場に関して「くつろげる場所がない」、「あまり遊びに行かない」、「見た目がよい」と回答した人が50歳代および60歳代に多いことがわかる。よって、この世代の人々にとって利用を促し、また、景観的に優れたものと感じさせるような整備計画が必要と考えられる。

次に、小学校に関しては、学区内に居住している人とそうでない人とでは、施設の捉え方・関わり方が異なると考えられるため、施設への愛着の要因に関する10個の質問項目（表2右列）への回答を説明変数、学区内に居住しているか否かを目的変数として、判別分析を行った（表9）。

表9 学区内・外を目的変数とする判別分析

標準化された判別係数			
1 利用する	0.56	6 目にする	0.17
2 くつろげる	-0.34	7 音を聞く	0.83
3 遊ぶ	-0.51	8 人に会う	1.44
4 話をする	-1.19	9 昔から使う	-0.89
5 見た目	-0.07	10 誇り	0.51

グループ 重心の関数	
学区内	-0.92
学区外	1.19

これより、学区内の居住者にとっては、「人と話ができる場所であり」、「昔から使っている」という要因が重要であり、また学区外の居住者にとっては、「音を聞く」、「そこに行くと同じ人に合う」という要因が重要であることがわかる。このことは、小学校に焦点を当て、学区内・外の住民を考慮に入れた整備計画の可能性を示唆していると言える。

4. おわりに

本研究では、まちおよび施設への愛着の問題に焦点を当て、それぞれの特徴および両者の関係を明らかにし、それ

らの知見が施設整備に与える都市計画的な示唆を議論した。

まず、まちへの愛着に関しては、その特徴から、「愛着平均者」、「愛着高、帰属・持続意識高」、「愛着やや高、帰属・持続意識低」の3つの回答者群に分けられた。この中で「愛着高、帰属・持続意識高」はまちへの愛着の程度が現時点および将来において高く、このグループに属する人々の属性としては、年齢が高い、居住年数が長い、子どもがいるという特徴があることがわかった。このことから、(どちらが原因でどちらが結果かは本研究からだけでは言えないが) 子どもを持つことと地域への帰属・持続意識および愛着の関係があると言え、子育て支援を目指したまちづくりなど、都市計画の面からも愛着形成に関与できることを示唆していると考えられる。

まちへの愛着と施設への愛着の関係については、両者の間に一定程度の相関があることが示され、広場、小学校への愛着が高いと、まちへの愛着も高くなる傾向にあることがわかった。また、この2施設の愛着に関する要因は異なり、広場については、「ここが好きだ」という要因が強く、まちに対しても「雰囲気や土地柄が気に入っている」という要因が強くなっていた。一方小学校については、「ずっと使い続けたい」という持続性・思い出に関連した要因が強く、これを反映して、まちに対しても「歩くのは気持ちいい」という一過性の利用に関する要因は重視されていなかった。これらの結果は、魅力的な施設を整備することにより、まちへの愛着を高めることができる可能性を示すとともに、施設に応じてその愛着の要因となる項目は異なり、愛着の形成という観点から、整備・計画の際に施設の種類の考慮する必要があることも示している。

施設への愛着の要因としては、広場や図書館については「くつろげる」などといった利用に関する要因が強く影響を与えており、広場、商店街、小学校については、「誇りに感じる」といった強い思いを示す要因が強く影響を与えていた。前段落での考察と同様に、施設の種類によって愛着を引き起こす要因が異なる点は、今後の施設整備計画に有効な視点を与え得る。さらに、広場に関しては年代(50、60歳代か否か)によって、小学校に関しては居住地(学区内か否か)によって、愛着を覚える要因が異なることもわかり、住民(個人)の属性が愛着に与える影響、およびこれらの属性が計画時に重要性をもつことを示している。

以上のように、本研究から得られた結果は、施設の整備とまちへの愛着形成の関連について、住民への調査に基づく実証的な知見を有しており、今後の施設整備方針(具体的には、今後、行政が各施設を整備・メンテナンスあるいは新設することになった際に)に活用することも有効ではないかと考えられる。例えば、広場・小学校の整備や、子育て支援策を融合することなどにより、地域に愛着を持ち、永く住み続けたいと思う住民を増やそうとする試みなどは、都市計画が関与できる有効な施策と言える。

今後の課題としては、より広い層から愛着に関する回答を収集し、結果の信頼性を高める(今回は女性の回答者の

割合が比較的高かった)ことや、愛着の因果関係について、時系列変化の追跡などにより詳細な研究を行うことが挙げられ、都市計画と愛着の関連についてさらに研究を進めることが求められる。

【参考文献】

- 1) 原田純孝・編(2001),「日本の都市法」, pp. 405-424, 東京大学出版会
- 2) 原科幸彦・編著(2005),「市民参加と合意形成」, pp. 223-247, 学芸出版会
- 3) 山田晴義(2002),「市民協働のまちづくり」, pp. 10-11, 本の森
- 4) Brown, G, Brown, B., and Perkins, D. (2004), New housing as neighborhood revitalization, *Environment and Behavior*, Vol. 36, pp. 749-775
- 5) 松田和香, 石田東生(2000),「都市計画マスタープラン策定過程におけるパブリック・インボルブメント活動および情報提供が市民意識等に与える効果の分析」, 都市計画論文集, No. 35, pp. 871-876
- 6) 吉村輝彦(2006),「都市計画とソーシャル・キャピタル(社会関係資本)」, 高見沢実・編,『都市計画の理論』, pp. 169-193, 学芸出版会
- 7) 鈴木春菜, 藤井聡(2006),「『地域風土』への移動途上接触が『地域愛着』に及ぼす影響に関する研究」, 土木学会論文集D, Vol. 64, pp. 179-189
- 8) 鈴木春菜, 藤井聡(2007),「利用店舗への愛着が地域愛着へ及ぼす影響とその規定因に関する研究」, 都市計画論文集, No. 42-3, pp. 13-18
- 9) 萩原剛, 藤井聡(2005),「交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析」, 土木計画学研究・講演集, vol. 32
- 10) 鈴木春菜, 藤井聡(2008),「『消費行動』が『地域愛着』に及ぼす影響に関する研究」, 土木学会論文集D, Vol. 64, pp. 190-200